

## 農村景観の再生：暮らしと社会のデザイン

Rural Landscape: Life and Social Design

真田 純子 *Junko SANADA*

東京工業大学大学院環境社会理工学院 准教授

Tokyo Institute of Technology, Dept. of Civil and Environmental Engineering, Associate Professor



### 専門不詳な研究者

学生時代は景観の研究室に所属し、第二次世界大戦前の緑地計画や緑地制度について研究していた、博士論文は東京緑地計画（1932年）を題材にした。図書館にこもって資料に埋もれる研究者、というのが私の目指す研究者像であった。が、今は棚田で石を積んでいる。そんなハードなことをやっているかと思えば、「風景をつくるごはん」というプロジェクトも進めていて、もはや何を専門としているのか不明である。自己紹介が難しい。

### 石積みプロジェクト

石積み最初に会ったのは、2007年に徳島大学に着任してすぐのことであった。ソバ播き体験があるというので出かけていくと、そこは石積みの段畑が特徴的な集落で、すごいところがあるな、美しいなど、その風景に感動した。ソバ播き体験をしてみると、畑に行く坂道で息が上がり、耕作面が傾斜した畑では小型の耕運機がまっすぐ押せず、翌日には全身筋肉痛になった。

そのとき、斜面地で暮らすということを何も知らないまま「美しいから残しましょう」といって景観計画をつくったり、保存の対象にしたりするのはあまりにも無責任であると思った。「もっと知らなければ」、そう思って畑の持ち主である石工さんに石積みを習うことにしたのである。

2009年には景観や地域づくりを学ぶ全国の大学生を対象とする「石積み合宿」を開始し、そうして石積みに関し

くなるにつれて、技術を持つのはほとんど高齢者で次の世代に継承されていないこと、各地の石積みの状態が悪く、修復をしなければ次々と崩れそうな状態にあることなどがわかってきた。また、石積みは単に擁壁をつくる技術にとどまらず、土地の読み方や道具の作り方、管理などにも広がっていてひとつの文化体系であることも見えてきた。風景としての石積みを残すだけでなく、自分たちが積むという文化も残したいとも思うようになった。そこで2013年には修復を必要としている各地の石積みに出かけて講習を開き技術の継承と修復を同時に行う「石積み学校」を開始した。今は活動を継続的なものにするため、学校の運営をひとつの生業にするべく試行錯誤中である。

### 「風景をつくるごはん」プロジェクト

きっかけは、農村部で高台から集落を一望したとき、風景の大部分は農業という人の営みがつくっていることに改めて気づいたことである。農村景観をその表象の特徴で語ることの限界を感じ、これまでとは違う、そこでの生活を含めたアプローチで行うべきだろうと考えた。その後、農業体験をしたり農家の人たちと話をしたり、ほぼ地産地消のみで生活してみたりするうち、農村景観の担い手は誰なのか、ということを考えるようになった。景観計画などの規制は農業者に直接かかってくるが、良好な景観を享受するのは観光に携わる人である。そもそも農村景観が悪化する最大の原因は耕作放棄であり、開発を抑制するという意味の「規制」は何の役にも立たない。農村景観を文化財にするのも、現状では「良いところなんだから残して」と農業者まかせにしているようなものである。

農村景観を享受するのは国民全体であるし、農業が産業のひとつである以上、消費者の価値観や消費行動が変わらない限り中山間地の農業は維持できない。消費者も農村景観の担い手であるはずである、と。そこで、都市部の人に自分の食卓が農村の風景や環境の保全とつながっていることを意識してもらおうプロジェクトとして「風景をつくるごはん」を開始した。このプロジェクトでは、単に消費するだけでなく、農村部の環境や社会が持続出来るような作り方の農産物を選ぶことも推奨している。



写真-1 石積み学校の様子

## 営農と地域文化、持続可能性

両方のプロジェクトに共通するのは農業と地域文化、持続可能性である。私がやっているモルタルなどの接着剤を使わない空石積みはその土地から出てくる石で積み、修復の際に石を再利用できる。中山間地域の農業は、地形や環境とそれを利用する人々の共存の仕方が、棚田や段畑をはじめとする風景として表れている場所であるといえる。

地域の文化や農業における環境の持続可能性を重視する考え方はヨーロッパでは認知されつつある。2015年にイタリアで開催されたミラノエキスポも、食と農業の持続可能性がテーマであった。2007年にイタリア農林省が発表した風景と農業の関係に関する資料では、政策としての美しい農村景観を「農業という経済活動と文化と環境の幸せな調和」と定義し、営農を軸に伝統的な農業と環境の持続可能性、生物多様性について様々な角度から検討している。

今年10月にイタリアで開催された Terraced Landscape の国際会議で用意された10個のテーマでも、営農が基本に置かれていた。例えば遺産のテーマでは「どのような措置をとれば、遺産になったことによってそこでの農産物の価値を向上させることができるのか」、「遺産という認証は風景や地域、社会文化にどのような変化をもたらすのか」ということがテーマ設定の意図として挙げられている。農産物の付加価値については「食べ物の質と段畑の風景にはどのような関係があるのか」、「この関係はどう可視化されマーケティング戦略に結び付けることができるのか、もしくはより高い暮らしの質という理想に向けて、どう商業主義を超えていくことができるのか」、「持続可能性、倫理、食べ物の質の名のもとに、どのような活動が風景を再生できるのだろうか」などの検討課題が示された。

農産物と土地や文化を結び付け、生産過程では持続可能性に配慮しつつ、しっかりと売れて農業が継続できることを目指すという考えがあることがわかる。日本でも中山間地域で新規就農を目指す人たちの動機や農村部へのIターン者が増えていることなどを考えると、こうした考えは今後広がっていくのではないだろうか。

## 価値観の転換と地方創生

こうした考えをベースに私が目指しているのは疲弊した中山間地域の再生である。環境や風景を守りながら、一次産業という生活を維持発展させていくことを目指しているが、その際に常に気を付けているのは、社会全体に意識を向けることである。

尾根道が幹線道路であった時代、斜面の上の方は交通の要衝であった。日当たりの良い湿度の少ない高地は、一度にたくさん出来る作物を乾燥して保存するのに適した場所でもある。中山間地域が「条件不利地」になったのは、大量生産、大量消費などの社会の変化によるところも大きい

と言える。地方創生の掛け声のもとブランド野菜をつくって一時的によく売れたとしても、選ぶ人たちの価値観が変わらない限り、地域間競争を生むだけであろう。地域でリアルな活動をしつつもその地域のためだけの活動に終わらせるのではなく、その先にある農村と都市との適切な関係について常に意識を向けておきたいと考えている。

社会の構造に目を向けるのは、私が研究者という立場にあるからである。地域を良くするには地域で活動するプレイヤーが必要であるが、研究者はプレイヤーにはなれない。だとすれば、地域での活動を経験値にして社会の価値観をどう変えていくのか、そのためにどのような施策や制度が必要なのかを考えていくことが私の仕事であろう。徳島にいる間、研究者として地域に関わるこの意味を考え続けた結果の、今のところの一応の答えである。

## 生活と社会のデザイン

最後に、若い人たちに向けてひとこと。ランドスケープの仕事とは、生活の設計であると思う。東京緑地計画を主導した北村徳太郎が、緑地によって病気になる都市をつくりたいと言っていたように、オープンスペースの設計はライフスタイルのデザインに行きつくと思う。

殊に農村景観に関して言えば、農業の枠内にとどまるのではなく、消費という都市の経済活動と環境、風景、それを利用した観光など、さまざまな要素が絡んでいて、社会全体のデザインである。そのため、これまでの研究分野の枠組みに捉われていては解決は難しい。そうした課題に立ち向かっていくには、まずは幅広い興味を持ってリアルな体験をすること、それらを意味づけする概念的な作業、その双方を行き来することが必要であろう。リアルな体験には、農作業体験のみならず、旅行や料理してしっかりごはんを食べることも含まれる。まずは生活者としての実態をつくるのがランドスケープの仕事の基礎になるだろう。

これまでの分野の枠組みに捉われず活動や研究、発信をすることが出来るのも研究者という立場の強みでもある。ただし、あまりに革新的であると論文にはなりにくい。研究者という土俵に乗れなければ自由な活動も出来ないので、まずは学問的基盤を充実させるのも必要であると、学生のみなさんには伝えておこう。

## (略歴)

広島県福山市の農村部生まれ。大学進学を機に上京。1996年にイタリア留学(1年)。2007年、徳島大学助教着任。9年弱を徳島で過ごし2015年より現職。趣味は産直市めぐりとジャムづくり。特技は空石積み。著書:「都市の緑はどうあるべきか」技報堂出版(2007)、「ようこそドボク学科へ!」学芸出版社(2015、編著)など。受賞:グッドデザイン賞地域づくりデザイン賞(石積み学校、2014)。